

あ
と
が
き

2011年、14年前の3.11東日本大震災の時、その時間私は羽田空港にいた。

大分から羽田に降り立ち、フロアに入ると電気は消え、床や階段に座り込んでいる人達を見て、ただならぬ状況を理解した。混乱する中、タクシー乗り場の列に並び不安を抱える中、娘から電話が入り「大変な事が起きている」事を知った。

普段の倍以上の時間をかけ、娘のマンションにたどりつき、TVで詳細を知った。

スーパー、コンビニに行っても、ジュース、お茶はあっても、もう水はなく、お菓子はたくさん並んでいても、米、パンの棚はスカスカだった。お店は普通に夜も空いていて外食をした。

長女の婿殿も友人と2時間かけて歩いて次女のマンションに合流。何か作って夕飯とし、4人で何を語りあったのか今はもう思い出す事ができない。

今まで経験した事のない災害に胸がつぶされそうだった。何をしたらいいのだろう、何ができるだろうかと思いながら日常を生活し、色々な仲間達の活動を見聞きしモヤモヤを抱えながら答えを出せずにいた。

その後、世界、日本も、新潟、熊本とさらに大規模な災害が続き、2024年は1月1日より能登の大きな地震から、1年が始まった。

大切な人との別れは、その前の心の準備や覚悟がある事が多いなか災害によって、突然、残酷に引き裂かれ生活を失う。

厳しい状況におかれた人達に思いをめぐらせながら、自分の仕事を日々している。

関わりのあったその中で自分のできる事、社会として正しい方向に向かうよう考え、自分の問題として捉える努力をしていこうと今は考えている。できる事をしていく事を心がけている。個人の問題は社会の問題である。人間は考える「葦」である事を胸に粛々と暮らしていきたい。

(編集委員長 貞永 明美)